

東日本大震災1年 63世帯本紙調査

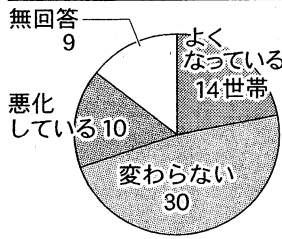
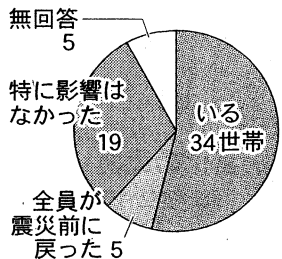
「心身不調」5割超、「悪化」16%

県内避難者ストレス深刻

東日本大震災から1年を前に、神戸新聞社が兵庫県内に避難している被災者63世帯にアンケートしたところ、心身の不調を訴える家族のいる世帯が5割超に上ることが分かった。半年前と比べ、ストレスが「変わらない」「悪化した」と答えた世帯も全体の6割を超えており、今なお厳しい生活を強いられている避難者の現状が浮き彫りになった。(25面に詳報、27面に関連記事)

心身の不調を訴える家族はいるか

半年前と変化はあるか



津波や原発の影響で心身の不調が続く家族の有無を聞いたところ、34世帯(54%)が「いる」と回答。「特に影響はなかった」は19世帯(30%)で、「全員が震災前に戻った」は5世帯(8%)にとどまった。半年前との比較では、「変わらない」が30世帯(48%)で最も多く、「悪化している」も10世帯(16%)。6回も自費で転居し、東京電力の賠償の見通しも立たず、不安ばかり(福島県富岡町の男性、33歳)や、「津波で妻を失った。時間が過ぎるほど寂しさが募る」(宮城県女川町の男性、83歳)などの声が寄せられた。心身の主な症状(複数回答)では「普段よりイライラする」が19人と最多で、「眠れなくなつた」(17人)▽「体調不良」(13人)▽「地震や津波の場面がよみがえる」(11人)▽「泣く機会が増えた」(10人)が続いた。一方、心療内科など専門家の助言を受けているのは7世帯(11%)にとどまった。

長期的な見守り必要

村上典子・神戸赤十字病院心療内科部長の話 被災地から遠く離れた避難者は、津波や原発事故の1次ストレスに加え、行政の支援や周囲の理解が得にくいなどの2次ストレスがある。心身へのリスクが高い。今は元気でも2、3年後に不調を訴える人もいる。周囲が「もう大丈夫」と判断せず、いつでもつらさや悲しみを吐き出せるよう、長期的な見守りが必要だ。

どまり、相談相手がいな
いまストレスを家族や
個人で抱え込んでいる実
態も浮かんた。

震災後の避難生活で
は、39世帯(62%)が今
も家族が離れ離れに暮ら
している。主な理由は「震
災前は3世代7人で暮ら
していたが、地元の仕事
がある夫、娘と別れて暮
らしている」(福島県南
相馬市の女性、59歳)な
ど。生活のために家族分
離を余儀なくされ、経済
面に加え、精神的にも追
い詰められている避難者
が目につく。

アンケートは2月中
旬、兵庫県内に避難する
約100世帯に用紙を配
布した。元の居住地は、
福島県が最多の33世帯▽
宮城県22世帯▽岩手県、
千葉県が各3世帯▽茨城
県2世帯。避難した理由
は「原発の影響」が37世
帯で最も多く、「津波や
地震で家が倒壊」が7世
帯、仕事探など「その他」
が9世帯だった。

(木村信行)